

知りたいことがすぐそこに

天台宗公式ホームページ開設へ <http://www.tendai.or.jp/>



写真：天台宗公式ホームページより

The Tendai Journal

天台ジャーナル

広報天台

2004年(平成16年) 4月1日木曜日 (毎月1日発行)

1部 50円 (消費税込・送料別)
発行所/天台宗出版室
発行人/出版室長 工藤 秀和
〒520-0113 大津市坂本4-6-2
天台宗総務庁内
電話 077-579-0022 (代)
Eメール/T-Press@tendai.or.jp

一隅を照らす運動推進会報

〈一隅推進会員〉
年度会費 (2500円) 中に会報
(天台ジャーナル) 購読料を含む。

極微 ごくみ

黒沢明映画に出る旗の
見事さについて語ったの
は、伊丹十三だ。
黒沢映画では、騎馬団
が付ける旗は、勇壮に風
になびいている。
古今東西、旗の下には
人が集った。志を同じく
する者たちの象徴でもあ
る。日本もイラク問題で
外国から「旗を見せろ」
と迫られたのは記憶に新
しい。
天台宗の宗旗は、天台
宗務庁に、静かにどっし
りと掲げられている。
私たちの旗は、その姿
が一番似つかわしい。

現代社会に広く浸透してきた情
報技術(ＩＴ)に対応して、天台
宗の公式ホームページが開設され
る。このホームページは、天台宗
総合研究センターの研究班が、一
年半の研究と準備をかけたもの
で、昨年には関係者による「試写
会」も行われ、四月一日にネット
上にオープンされる。



宗教心を広く
喚起し、仏心
の目覚めを生
活の中に浸透
させることに
あるが、イン
ターネットを
通じて、開か
れた天台宗を
広くアピール
できるといっ
たメリットが大
きい。
ホームページ
では、天台
宗のほぼ全部
の内容を閲覧
することができる。専門分
野の難解にな
りがちな内容

社会のニーズに答えて

天台宗がホームページを開
設したのは、実は数年前に遡
る。それも一隅を照らす運動
総本部が開設したホームペー
ジを、試験的に公式ホーム
ページとした暫定的措置で
あった。

しかし、開設後に起きた日
本海重油流出事故の際、仏教
青年会を中心に、回収ポラン
ティアの募集、現地レポート、
情報伝達の即効性など、当時

の宗団の実務から考えると、
画期的な成果を上げていた。
当然、宗の内外から公式
ホームページの開設や、ネッ
トワーク化の必要性を論じる
声が高まってきた。

平成十四年に、天台宗総
合研究センターが開設され、
ホームページの開設や、ネッ
トワーク化に向けた研究が課
題に加えられた事は、時代の
要請であった。

四月一日公開

をさけて、写真や映像、音声
をふんだんに採り入れ、パソ
コンの初心者にも操作が簡単
にでき、画面が見やすく工夫
されているのが特徴である。

一般を対象にした内容で
は、仏教の教え・天台宗の歴
史・法要や声明、全国の天台
宗寺院・僧侶になるには・出
版刊行物の紹介など必要かつ
十分な内容。

ホームページで声明が聴
けるなど、これまで間接的に
しか知られていなかった内容

が、直接自分の目や耳で確か
められる。
また、檀信徒のお勤めの作
法と心得や、Q&A、法話集
など日々の生活の中に密着し
たコーナーも充実しており、
天台宗の新しい布教活動とし
て注目される。
これらのIT活用にあつ
ては、天台宗の全寺院に、パ
ソコンやインターネットの利
用率等をアンケートし、問題
点も考慮されつつ進められて
きた。

今後内容更新は天台宗総務
部が担当し、常に新鮮な情報
を掲載する。
「素晴らしき言葉たち」は、
2面に掲載。

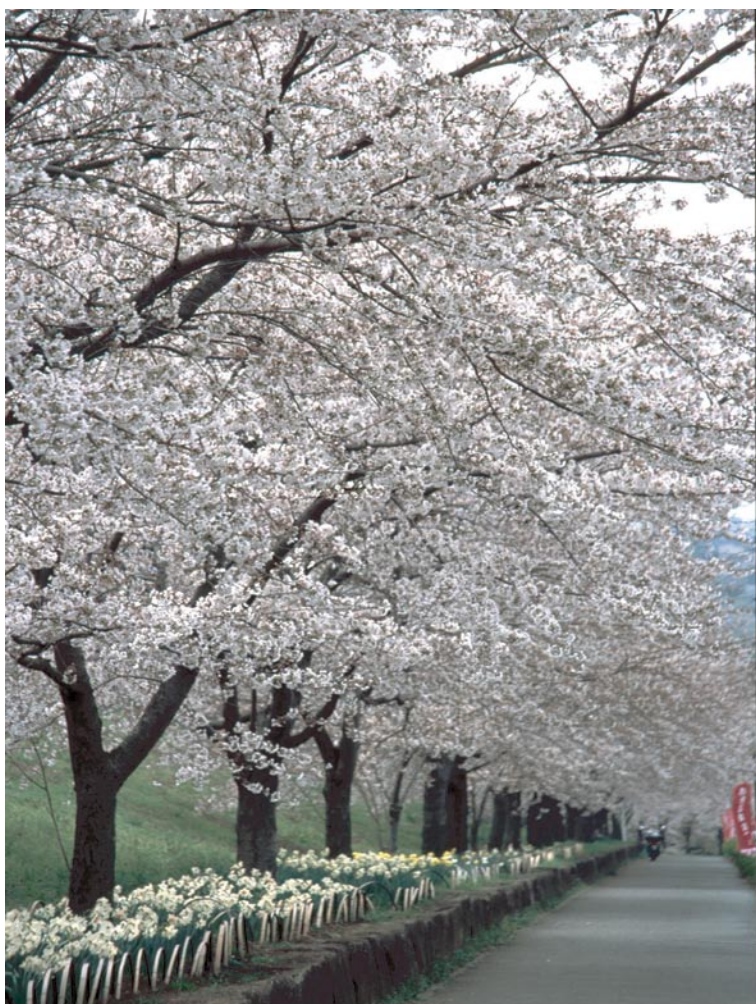
『広報天台』復刊に寄せて

「日々変化する時代には、新しい広報が必要だ」と西郊
良光宗務総長が主張してから二年余が過ぎた。その要請に
応えるべく、出版室では昨年天台ジャーナルを創刊して方
向を探ってきた。いたずらに、時代に迎合するつもりは毛
頭無い。それよりも住職・寺族に受け入れられ、檀家や信
者の方々も読んで頂けるといふコンセプトで、取材と編集
を続けた。権威にならず、かき高なものでないならず、お
互いが車座で話し合える紙面を理想としてきた。

今号から「広報天台」、また「一隅を照らす運動推進会報」
という肩書きが増える。デザインも変え、ページ数も増え
た。しかし、理想とするところは変わらない。
実は、広報天台は「新しい名前」ではない。三十六年前
に、私たちの力が足らず、一度休刊となり、比叡山時報に
間借りしてきた名前である。しかし、いいじゃないか。一
度や二度の挫折は誰にだってある。完全無欠より、その方
が親しみやすくいい。このネームタグを再びつけられる
ことは、私たちの名誉である。さあ、締めていこう。
読者の皆様には、ご愛読をお願いします。
(七面に関連記事)

平成十六年四月一日

出版室長 工藤 秀和



花想風言

花の美しさやいとおしさは、不惑、還暦と年を重ねるごとに深くなっていく。小学生のころ大戦で焼け野原になった東京から無動寺谷の阿闍梨さんのもとへ小僧に登った。

叡山では四月はじめ、軒下に雪が残り底冷えがする根本中堂内陣で御修法という天下国家と皇室や国民のいやさかを祈る一週間の秘法が厳粛に執り行われる。終わって山を下ると日吉山王祭りだ。山麓では弾けるような春に人も花も踊っている。小学校への通学路を彩る日吉馬場の桜並木に子どもながら思わず目を見張った覚えがある。

バラ科サクラ属、日本列島

第1回 サクラ 福田徳衍 (文・写真)

では五千年前の縄文遺跡から桜材で造った弓や櫛などが出土している。

満月を仰ぎながら咲きほころぶ桜を褒める宵のひとときを「桜月夜」とよび今年四月五日が満月の宵にあたる。

ねがはくは

花のしたにて春死なん
そのきさらぎの望月の頃
と詠んだ西行(一一一八〜一九〇)は願いどおり河内の弘川寺で涅槃会の翌日の二月十六日に没した。太陽暦に換算すると三月三十日、桜月夜のおぼろな宵だったと史書にある。

◆プロフィール
一九三六年東京生まれ。十二才から二十才まで比叡山で小僧生活をして過ごした。元朝日新聞記者。信越教区新潟湯部飯山徳法院住職。俗名福田徳郎

鬼手仏心

「少年A」に

天台宗宗務総長 西郊 良光

平成九年の神戸・児童連続殺傷事件で保護処分となっていたあなたの医療少年院仮退院が決定した。正直な気持ちといえば、戸惑う思いだ。

「心の闇」は矯正されたのか、性的サディズムは克服されたのか、再犯性はないのか、と危惧する。もちろん私は、仏教者であるから、み仏の慈悲は、あまねく全てのの人々にあると信じている。亡くなった方々のご冥福をお祈りすると共に、あなたの更正を切に願っている。

だが、同時にひとりの社会人として、あれだけの事件の後遺症から、私自身が未だに抜け切れていないことを認め

ないわけにはいかない。人間の性質は本来善であるが、規範が狂い、生命を軽視することによって、どれだけ惨いことをするのか、その現実の前に立ちすくんだ。

世間には、いのちの価値を安売りするようなゲーム、コミック、ビデオという仮想現実(バーチャルリアリティ)が氾濫している。仮想の世界では、いのちはリセットしたり買い換えたりすることで簡単に「再生」できる。それを情報化社会というなら、その代償に、我々は青少年の精神がどれほどまでに壊れることが出来るのか、悪をなすことが出来るのかを、あなたの事件

を通じて見せつけられたともいえる。

あなたは、立ち直る機会を与えられた。そのことを充分に生かして欲しい。同時に、今後の人生は、殺傷した人々のいのちの重さと向き合っ生きていくことになる。罪を償いながら生きてゆく日々の中で、苦しい時はあるだろう。いや、その連続だろう。

私は、み仏に向かい、あなたが殺傷した人々のために、残された遺族の皆様のために、このような事件が再び起こらないように、そしてあなたの魂が安らぐ日が訪れるように、祈る。

団参に『はなびら』を

開宗千二百年慶讃大法会事務局

開宗千二百年慶讃大法会事務局では、大法会総登山の一環に、総本山延暦寺に団体参拝する人々に向けて記念の散華を作成した。

今年度から、団体参拝の団員には、全員に配布される。散華とは、法要などで仏を

迎えるために僧侶が撒く「はなびら」のこと。

かつては、本物の花が使われたが、現在では紙製のものが使用されている。

新しく作られた散華は、伝教大師の真蹟から集字した「登叡成佛」と、御廟であ



素晴らしき言葉たち

Wonderful Words

この世には根性を貫いたがゆえに、敗れ去った人だっただけに、敗れ去った人だっただけに、純粋であればあるほど、この世では敗れざるを得ない。

まったく無名の人物でも、素晴らしい、己を貫いた尊敬に値する人物はいっぱい存在したはずだろう。そういう人間の運命の方に、ぼくは加担したいな。

「強く生きる言葉」 岡本太郎
イースト・プレス刊

人間ていいな、と思うのは、爽やかな生き方をしてる人に出会った時だ。

私たちは凡夫だから、有名な生き方に感動を覚えることが多い。

しかし、世に名前のある人は、私達と違う別の世界に生きていて、とつても近寄れないような気がするの、本当だ。

一方で、ただひたすらに黙々と生きる人を素晴らしいなと思う時がある。それは、その人の中に侵しがたい力があるからだ。世間におもねらず、他人のマネをせず、そんなことには全く無頓着に自分の生き方を貫く

に生きているからだ。生きることに意味は、その結果よりも過程にある。いかに自分の志を曲げずに歩き続けるかということだ。宗祖のご生涯に照らすまでもなく、襟を正さなくてはならない。

正しいと思うことを中々に言えない世の中だ。いや、自分に意気地がないというより、純粋でないから言えない、というのが正解かな。世間の目からは、敗れ去ったように見える人々も、実はそうではない。黙々と生きる人々に私たちが加担したい。「敗れざる人たち」に――。

る浄土院にエイザンスミレをあしらった二種類でワンセット。

天台宗は「あなたの中の仏に会いに」をスローガンに檀信徒総登山・総授戒運動を展開しているが、今回の散華は寺院の団参であれば、誰でも、

もれなくもらえる。

大法会事務局では「この散華は、総登山の一助になれば」と作成した。そのことで開宗千二百年の意義を再認識して頂き、ひとりでも多くの方に参拝と授戒に参加して頂ければ」と語っている。

談話室

仏教の

散歩道



ひろ さちや

作家の 弘明 さん。 仏教の 散歩道 について、 切実な 持論を 著書に 展開。 新潮社 出版。

「明」という漢字は、「日（太陽）プラス「月」だと思っていました。だから「明るい」のだと。けれども、それは素人の解釈であってまちがいです。白川静『字統』によりますと、この字は「囧」と「月」の組み合わせです。そして「囧」は「窓」であって、窓から月光が入り込むのが「明」なんです。そういえば、昼間、太陽と月と一緒にいるわけがありませんし、たとえ太陽が出ているあいだに月が出ることもあっても、そのときの月はちっとも明るくありません。いや、そもそも月

そのものは発光体ではなく、太陽の光を反射しているだけなんです。まあ、ともかく、「明」という字は窓から入り込む月光の明るさなんです。それほど明るいわけではない。むしろ薄暗い感じ。それでちょうどいいのです。というのは、わたしはここで、中国古典の『近思録』（巻十二）の言葉を思い出さずからです。『明極まれば、則ち察に過ぎ、

ほとけさまは半眼

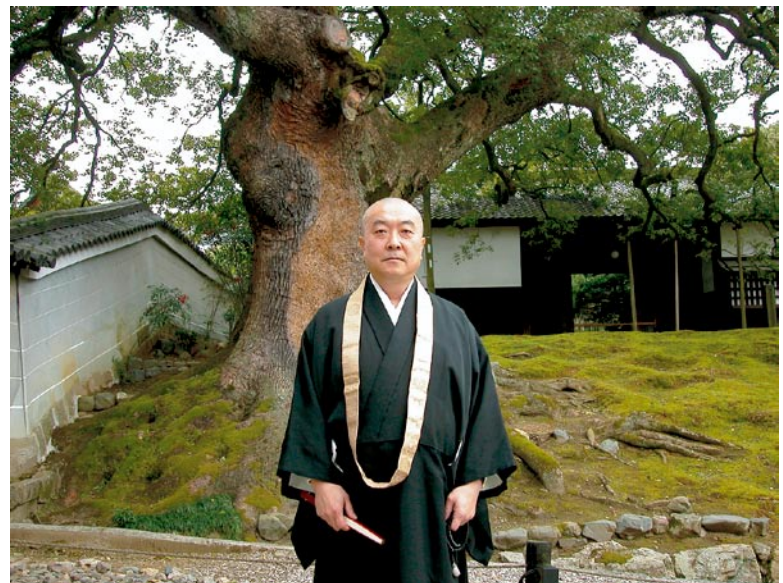


(カット・伊藤 梓)



「明極まれば、則ち察に過ぎ、見開くのもよくない。半眼に開くのです。また、仏像においても、ほとけさまはほとんどが半眼です。かつと目を開いているのは、お不動さんだけでしょう。お不動さん、すなわち不動明王は大日如来の使者で、仏教の世界でいけば警察官の役目を担った存在です。だから、目をかつと開いておられます。しかし、慈悲の存在である如来や菩薩は、そんなに目を開いてはいません。半眼にして情報量を少なくしておられるようです。だって、わたしたち人間はみんな欠点だらけの存在です。虫眼鏡で拡大するまでもなく、かつと目を開いて見られるならば、欠点ばかりが大写しになります。ほとけさまは慈悲のこころでもって、わたしたち人間の欠点を見ないように、いいところだけを見るようにしてくださっているのだと思います。わたしたちも他人を見ると、あまり目を開いて見ると、をやめましょう。他人を半眼で見ることが慈悲のこころではないでしょうか。

《疑い多し》 明極まるというものは、ものごとがあまりにもよく見えすぎることです。そうすると察に過ぎます。観察しすぎるわけ。それで疑いが多くなるのです。その通りですよ。たとえば、美人の肌を虫眼鏡でもって拡大して観察してごらん下さい。百年の恋もいつぱんに醒めてしまいうでしょう。窓から入ってくる月明かりでもって見るのがいいのです。つまり、あまり情報量が多くなつてはいけません。そう考えると、坐禅のときに目を半眼にすることの意味が納得できます。目をつぶつてはいけません。そうすると眠くなります。かといって、目をかつと見開くのもよくない。半眼に開



青蓮院門跡の第49世門主に就任した 東伏見 慈晃 師

幸せの鍵は宗教心

京都・青蓮院門跡の第49世門主に東伏見慈晃師が就任した。父である東伏見慈治前門主の退任に伴い、座主猊下から住職辞令の親授式が行われたのは、二月五日である。穏やかな雰囲気と、柔らかい口調が印象的な慈晃門主だが「僧侶は、物をつくらねばない代わりに、心をつくらねばならない」と語る時、目には鋭い光がこもる。青蓮院門跡は、代々皇室ゆかりの人々が住職を務めてい

る。慈治前門主は、天皇陛下の叔父であり、慈晃新門主は従兄弟にあたる。慈晃門主は、昭和十七年に前門主の次男として京都に生れた。当時、前門主は京都大学で研究を続ける学者だった。僧侶を意識するのは、小学生の時、父が京都大学講師を退職して、昭和二十七年信州善光寺住職に就任してからのことである。「当時は、戦後復興の激動の時。食べるものも満足になく、米や野菜や機械など、とにかく何かを作らなくては生きていけない時代だった。何も生産しないようにみえる僧侶に違和感があった。得度も勧められたが興味はなかった。」だから大学は法学部、卒業後は銀行に就職という在俗でサラリーマンの道を選んだ。「歴史を背負う家柄という意識はなかったが、同僚や先輩から『世が世なら、同席できない人』と見られるのは重荷だった。」その銀行支店長だった生活が一変するのは、平成五年、五十歳の時である。「高齢の門主を助けなくては」と決意して銀行を退職する。青蓮院門跡の執事長を務めながら、自分の子どもより若い人々に混じって、叡山学院、大正大学大学院へと、僧侶になるための学生生活をやり直した。当面は、前門主の路線を継承することになるが、一般社会で鍛えられた経験から「いかに今の社会が宗教と無縁かはよく分かっている。けれども利益追求のみみよければという人間も同じ事。皆が幸せになるキーワードは宗教心だと思ふ。そのきつけ作りをしたい」と。「社会的存在としての僧侶への違和感は未だにあるが、それを反面教師として理想の宗教者の姿を追求したい。決して自己満足に終わらないように。」五月四日には、住職就任式である晋山式が行われ、併せて前門主の名譽住職称号授与披露が行われる。(聞き手・廣部光信)

お便りを下さい

あなたの周りでの出来事、ご感想をお送り下さい。また、取材について「こんな出来事、あんな人々」をお知らせ下さい。封書、FAX、Eメールで、天台宗出版室まで。連絡先は、題字横です。

FAXは、077-578-4814

総本山 延暦寺御用達

文化財修復・社寺建築



木澤工務店

本社 〒606-8414 京都市左京区浄土寺真如町111番地の1 TEL(075)751-0628(代) FAX(075)752-9430 工場 〒529-1314 滋賀県愛知郡愛知川町大字中宿173 営業所 TEL(0749)42-2859(代) FAX(0749)42-5727

A Story in the Tendai

お寺にある不登校の子と共に歩む父母の会

兵庫・清水寺住職 清水谷 善英 さん

仏と生きる

Vo1.4

オイツルを着た巡礼夫婦が「あらっ、お寺で結婚式よ」とまぶしそうな声をあげた。
 西国の第二十五番霊場である播州の清水寺で一組の結婚式が挙げられたのは、今年の二月二十一日のことだ。新郎は同寺の近くで自然農業を営む藤原明という。彼は、清水谷善英住職が主催する「学校に行けない子どもと共に歩む父母の会」参加者の子ども、いわゆる不登校児だった。「かつては隅っこで黙っているだけの子どもが、こんなに元気になりよって」と清水谷と妻の桂子は感無量だった。

親が変われば子も変わる

会の正式名は「愛和会」という。不登校の相談施設を寺が提供しているのは珍しい。それも檀家や地域という限定ではなく、あらゆる人々にオープンにしているのは、清水寺ぐらいだろう。
 不登校の子どもを持つ父母なら誰でも参加できる。参加時に、社会的肩書きも、住所も氏名さえも明かさなくてOKだ。
 毎月一度、第二土曜日の午後、佐藤修策元兵庫教育大学学長と濱名昭子臨床心理士をカウンセラーとして招く。全員がボランティアでの活動である。

◎ 家族を再構築 ◎

不登校は、特別な子どもがなるのではない。文部科学省も「誰がかかってくる可能性がある」と発表している。佐藤は「不登校問題は現代の家庭、学校、社会がもつ一般的な病理である」という。
 では、なぜそうなるのか？ いわゆる「良い子」がかかりやすい。優しい優等生が、突然学校に行けなくなる。子どもから大人への過渡期に脱皮するエネルギーが弱いと指摘もされている。
 しかし「原因を追及しても、問題の解決にはつながらんよ」と清水谷は断言する。
 今は、二人とも、実にあつからんと突き抜けていて、笑い声が絶えないが、長男が不登校になった当時は「地獄だった。」
 本来衆生を救うべき寺に不登校の子どもなど世間体も悪い。桂子も「良い学校から、良い大学、良い企業へ」という世間の常識に呪縛されていたことを否定しない。「外へ出るのも嫌だった。」
 しかし「そういうタテマエの愚かしさを捨てて、お互い迷わないで生きてゆけるようになった。」

もう一つの価値観がある

「一般の価値観とは別の価値観があるんです。息子が不登校になったおかげで、人の良いところを見られるようになった」と言うのは桂子である。
 「世間から馬鹿にされたり、弱い人に、温かいものをを感じるようになった。またその人たちが私たちに暖かさを感じてくれたのがわかるようになった。」
 「そうだよ、小難しい話ばかりしても、しょうがないもの」と清水谷が笑い飛ばした。今、生きている人間、悩んでいる人間を相手にしなくて何のための宗教かとも聞かせる。
 「今の時代、人の足を引っ張ったり、抜け目なく生きる人が成功者になる。優しく思いやりのある人は、生きにくい。けれど、最澄が考えた人材は、どちらかと思える。」
 愛和会では、宗教の話は一切しない。お経もあげない。お寺を会場として提供しているだけである。「佐藤先生の勧めではじめたんだけどね、ここは気分が落ち着くし、いいでしょう。四季の花だって咲いているし。」
 けれども、愛和会の子どもたちは、寺に遊びに来る。教えたわけでもないのに、本堂で手を合わせる。清水谷夫妻と、愛和会に通う父母たち、子どもたちの関係は親戚以上だ。
 修学旅行に行っていない子どもたちが多いので、格安ツアーでハワイにも連れて行った。忙しい正月には、リハビリを兼ねて子どもたちをアルバイトに使う。
 会得不登校を克服した体験を語り合った時に、ある少女が両親に言った。



愛和会OBの藤原明さんは、清水谷住職の戒師で、中間龍子さんと清水寺で結婚式を挙げた



ハワイ修学旅行にて

「お父さんや、お母さんが悩んでいることは解っていた。学校に行つて欲しいと思っていることも知っていた。苦しかったと思う。だけど、私も苦しかったんだよ。」
 テレビドラマなら、涙、涙の場面だが、実際には淡々と語られるのが、逆に彼らの歩いてきた苦しい道を感じさせる。
 清水寺の活動は、不登校ばかりではない。地域の子どもたちを、春休みには年に一度西国まいに連れて行く。十人乗りのワゴン車で、運転は清水谷だ。全員が静かに座るのは、お経のときだけ。あとは、ワイワイと騒ぎながらの巡礼である。参加した子どもたちは、知らず知らずのうちにお経を覚えて、御詠歌も唱える。
 お盆の棚行に行く、その子どもたちが出てきて、自発的に仏壇の前に座る。「うしろに座って、ウチワであおいでくれるんですわ。」
 今回、清水谷の戒師で結婚した藤原明は、無農薬、有機肥料で農業を営む。不登校の時、野菜を届けにきて、黙って差し出すだけだった。「これね、藤原君がつくった大根を、ウチで沢庵にしたんです。うまいです。まあ、食ってみて下さい。」
 私は、沢庵をポリポリ噛りながら、清水谷が正力松太郎賞を受賞した時の推薦文を見た。そこに彼は、今後の活動について、こう書いていた。「不登校の子どもが無くならない限り続けていきたい。」
 (文中敬称略)
 文・天台宗出版室編集長 横山 和人

第2期 續天台宗全書

全十巻 予約購入募集中！ 天台宗特価

- ◎前半一括前払い 100,000円 (5巻代金・消費税・送料込)
- ◎各巻前払い 21,630円 (1冊代金・消費税・送料込)

ご購入には上のどちらかをお選び下さい。

新発売

入手困難な佛典の画期的翻刻印刷 天台宗典編纂所編 春秋社刊行

第1回配本 宗要光聚坊 上

天台宗典編纂所 FAX 077-579-6639

ぜひ寺院に1セットお備え下さい

■お問い合わせ 天台宗典編纂所 電話 077-578-5190

第1期全15巻は完結終了しました。有り難うございました。

一隅を照らす

90年ぶり寺檀一体となつて

Newly-Build Celebration
2004/4/18

本堂新築落慶

4月18日に奉告法要



東京都・江戸川区
牛宝山 最勝寺

東京江戸川区の牛宝山・明王院最勝寺(山田俊和住職)では、新本堂が完成し、四月十八日に落慶式が執り行われることになった。

一千百年の寺史を有する同寺は、江戸の町を護る五色不動のうち、目黄不動で有名。大正二年に現地に移築されたが、関東大震災や老朽化により山門、不動堂、客殿と修復を重ねてきたが、今回最後の大事業が完成した。

同寺はゼロメートル地帯のために、地盤沈下がひどく、基礎部分のくらくらや傷みなど多大な影響を受けており、本堂の早期大修理に迫られてい

たが、平成十二年に新築を発願、同十四年に着工されていた。

地盤の悪さから、建物は軽い木造とし、基礎部分を堅牢とした構造となっているが、規模は旧本堂より一回り大きい七十二坪(旧本堂は五十五坪)、本瓦葺きで向拝・回廊・廊下・収納庫などを付設した壮麗な伽藍となった。元本堂に付属していた蔵は位牌堂として残され、また、本尊釈迦如来三尊像をはじめとする仏像も大修理が施され、さらに新たに十三仏尊像も作成された。本堂右奥にはその十三仏を安置、左奥には回転経蔵が安置されている。

山田住職は「山門、客殿、不動堂に続いて、ようやく念願の本堂新築をみるに至った。寺としても積立金を全部使用したが、ほとんど全部の檀信徒各位が一致協力して頂き、私共の予想を大きく上回る寄付を頂いた。感激している」と語っている。

二十一年に一度の御開帳

兵庫・正福寺

4月28日
~30日

兵庫教区正福寺(熊谷亮澄住職)では、四月二十八日から三日間、二十一年ぶりの不動明王御開帳を行うのにあわせて、二十九日に開宗千二百年慶讃大法会特別授戒会、三十日には、渡辺恵進座主を迎えての御親修を執り行う。

無住の時代もあり、荒廢の一途をたどったが江戸時代からの經典など千冊余が伝えられている。

正福寺の本尊である不動明王は、平安中期の作で同寺中興の祖である義密法印が現在の浜坂町洞谷より勧請し、県の重要文化財に指定されている。

また、同寺に伝えられる大般若経は三百三十四年前に作成されたもので、今回の勝縁を機に修繕された。あわせて諸堂、石垣などの破損も修復された。

特別授戒会、御親修も

二十九日の特別授戒会は、伝戒和上に座主代理・小堀光詮三千院門主を迎えて、同寺戒弟は百七人が予定されているが、兵庫教区第五部の授戒会会場としても使用されるため、同寺で行われる戒弟数は三百人を越える。

また三十日には渡辺座主の御親修が行われ、三日間の御開帳を円成する。

天台トピックス

全国宗務所長会議

三月十一日から十二日にかけて、全国の宗務所長会の定例総会と第六十六回宗務所長会議が天台宗務庁に於いて開催された。

天台宗では、全国を三十の教区(海外、伝承法流を含む)の区画に別けて宗団運営にあたり、全国の知事に相当する役割を担うのが宗務所長である。

宗務所長会からは、地方寺院の活性化、宗務庁と教区間に於ける事務の簡素化、広報

教区実務担当者連絡会

の充実など、各地方が直面している諸問題について、宗団に検討策が要望され、宗務庁は個々の問題に検討を加え、善処したいと回答した。

本年は開宗千二百年慶讃大法会期間の二年目にあたり、各地での特別授戒会が頻繁に開催される予定があり、その運営方法など細部にわたり意見交換が交わされた。

教区に出版通信員を委嘱

昨年十月に各教区の人事が確定したことにより、新担当者に実務の周知を図ることが目的。

会議は宗務庁の所管担当者から事務説明があり、参加者からの質疑に答える形で進められた。

祝 新任職任命

出版通信員は、各地の行事予定や、行事の報告を行う他、取材対象の推薦、紹介などの業務を行うなど、本紙を含め、天台宗が発行する各種刊行物の発行に重要な役割を担う。

また、出版通信員から寄せられる情報は、近々開設される天台宗公式ホームページの、教区情報としての掲載も検討されており、その活躍が期待される。

このたび刊行開始した第2期『続天台宗全書』全10巻は高価な書籍である(20万円)。これを寺院の法財として蓄えていたきたいと念願している。ぜひ檀信徒の方々は、所属の寺院に1冊ずつでも、仏像を納める心地でご寄付をお願いしたい。

法財を蓄える

仏法僧の三宝に帰依する、と最初に唱えて読経をするのは相当に古い。この僧宝は、私が僧の私に帰依するわけではない。これは僧伽(サンガ)つまり教団への帰依を意味している。

僧伽が減れば仏教が減ぶという「一体三宝」説は相当に古くからあり、聖徳太子『勝鬘經義疏』や宗祖の著書に見られ、伝統となっている。寺院は、仏像や經典や僧侶がないと機能しない。仏像が必須なように、仏典も非常に大切な寺の設備である。仏典

は、紀元前から筆写を繰り返して、現代に伝えられた。時あたかも学問宗の天台宗開宗千二百年。現代の必需品とした乗用車よりも、仏典が寺院必須の法財であることに変わりはない。仏典の所有と活用が僧侶の仕事、信仰や心が形に表れた財であることも変わらぬ。未

来も、経済主義の社会と、僧侶の精神世界とは、別ものであつて欲しい。

お申し込み・お問い合わせ
〒520-0113 滋賀県大津市坂本4-6-2
天台宗務庁内
天台宗典編纂所
TEL 077-578-5190
FAX 077-579-6639

『広報天台』三十六年ぶり独自で

読者の皆様への手紙

会議室の明かりがついた時、立ち上がれないぐらいの衝撃に襲われた。

今月から開設される、天台宗の公式ホームページ関係者試写会のことだ。

ボタンひとつをクリックするだけで、伝教大師のみ教えが出る、修行の動画が出る、お経が解説され、実際に声明の音が流れる。それは圧倒的な情報量だった。

「活字広報の時代は、もう終わったのではないか」と思わせられた。事実、会場のおちこちから「広報は、全部インターネットで充分ではないか」という声すら聞かれた。

しかし、すぐに「それは、違っぞ」と思い直した。

私たち出版室は、今号から正式に天台ジャーナルを「広報天台」として再び担うことになる。実に三十六年ぶりのことだ。

天台宗が「広報天台」を発行したのは、昭和四十三年一月一日

である。総本山延暦寺が発行されていた「比叡山時報」に遅れること十一年であり、発行回数も年に三、四回であった。しかも、その僅か二年後の昭和四十五年七月二十日には、第十号をもって休刊となる。

以来、天台宗は「比叡山時報」のお世話になりつつ、広報を続けてきた。本来、読者の皆様には、独自に天台宗の、理念と活動内容をお伝えするべきであるが、力及ばなかったのである。読者の皆様と、延暦寺様には、その間、随分ご迷惑をおかけした。心よりお詫びと、御礼を申し上げます。

「この活字離れの時代に、新しく広報紙を立ち上げるとは勇気ある行動だ」と半ばあきれた声も聞いた。確かに、クリアすべき問題は山積している。皆様にお届けする発送費用削減のため、是非とも第三種郵便の認可を取得しなくてはならない、印刷費のコストダウンも緊急の課題だ、編集スタッフの補強も絶対である。

しかし、苦しみ、わめき続けながら、昨年一年ジャーナルを発売するうちに、読者の皆様から確かな手応えがあった。地方に行け

ば「あの記事見たよ」という声を聞かせて頂いた。「この人に取材してみよう」というお便りや、電話が、次々と来るようになった。その時々の記事の内容で、一部、二

部と買って下さる読者があった。数千部まとめて注文して下さいました。宗議会でも、殆ど毎回取り上げられ、お叱りや、励ましを頂いた。

所長会からは、このまま広報紙として充実させよという要望を頂いた。私たちは、自分たちの書いた記事によって話題の中にいた。かつてないことである。

す運動総本部の広報紙という側面も併せ持つ。一隅のページは、よりビジュアルにして、会員の皆様が楽しく読めるものになりたい。もちろん紙面全体からも、天台宗の展開する一隅運動が浮かび上がるようにしたいと考えている。

見やすく、解くやすく

きる原動力でもあるから、話は難しい。

もちろん犯人を怨み、死刑を願い、又謝罪を求め続けることを、心の支えとして生きていく人を、誰も非難することはできない。しかし、それでは心の平安は訪れることはない、釈尊は説く。それでも心の平安などいらない、という人も

いるだろう。だが苦しみぬいて人間の存在の根源に触れたとき、今まで非常識として耳に入らぬ釈尊の言葉も、常識として聞かえらる瞬間である。世間の常識は常識以上のものを与えな

いが、宗教の常識は奇跡をもちたらずとはこのことである。

オウム事件は、宗教が反社会的存在になり得ることを示した。釈尊の言葉とは反対に、布施の金額とか修行の長さとか、数値で計

れる代償を払えば、それに応じた対価を得られるという、世間の常識を尺度に勧誘をする宗教は、常にその危険を伴う。悩める人にとって二セものほど魅力的に

写るのもまた現実である。しかしこの煩惱が個人の生

元天台宗宗務総長
純義 杉谷

オウム裁判と宗教

オウム真理教の麻原彰晃の裁判で、死刑の判決が下された。一連の犯罪の規模や反社会性、残忍性などを考えれば、本人が直接手を下していても、当然の

判決であるというのが大方の評価だ。一方弁護団は本人の意思も確認せずに判決を不服として直ちに上告、そのうえ解散してしまっ

た。そのうち麻原被告弁護団の目的が麻原被告弁護以外にあるように思われ機が叫ばれている所だ。

それはさておき、天台宗は公式に死刑制度廃止を提唱している。だから麻原被告の死刑判決には反対でなければならぬ。この立場は、被害者やその家族の

神経を逆なでにし、多くの世論を敵にまわすことになり。常識はずれの考え方だ

客観報道だけにたよって、血の通わない記事では意味がないと思っている。記者や編集者が、一歩も二歩も前に出て、読者の前に姿をさらして、紙面作りをすべきだろう。連載をお願いする諸先生にも、思い切つて自分のカラーを出して頂きたいとお願ひした。速報性や記録性も必要だろうが、なにより読者に読んで頂き、話題にして頂くことが大事だと思う。

一年の間、本紙は、一隅を照らす運動総本部の広報紙という側面も併せ持つ。一隅のページは、よりビジュアルにして、会員の皆様が楽しく読めるものになりたい。もちろん紙面全体からも、天台宗の展開する一隅運動が浮かび上がるようにしたいと考えている。

天台宗出版室長 工藤 秀和
同 編集長 横山 和人

ほら、
あなたも
輝いている

インドで私も考えた

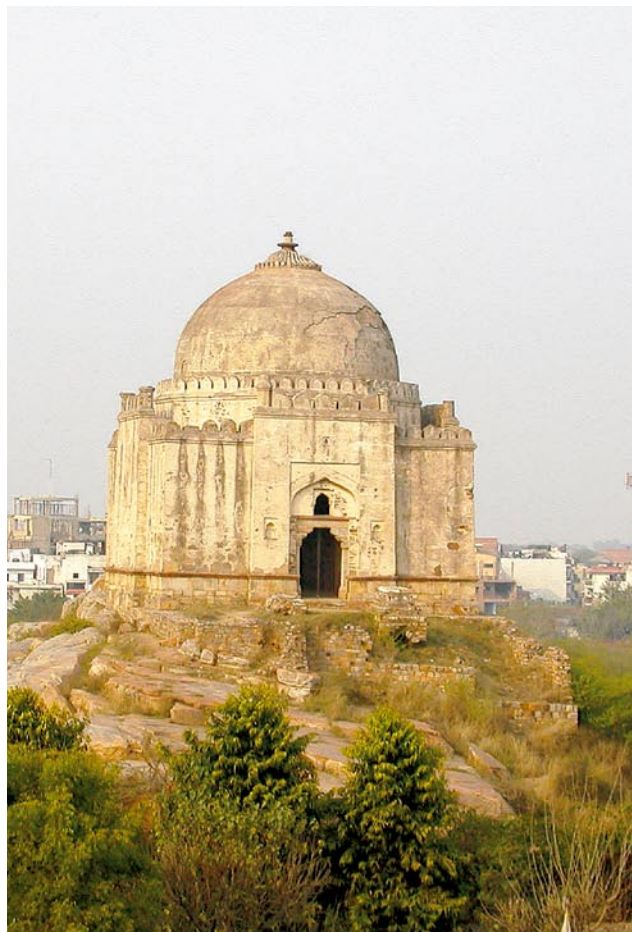
①

一隅を照らす運動総本部長

壬生 照道

『乗り遅れる！』

初めてインドの地を踏んだ壬生照道総本部長は、最初の日程から「予定していた現地ガイドが現れず、飛行機に乗り遅れる」というカルチャーショックに見舞われた。その他、インドでの生活で、思わず考え込んでしまった体験を語る。



インド・デリー市内の寺院

インドでサンガトナ・法天・マナケ師が主催する、パンニャ・メッタ・サンガ等を視察する「第七回インド交流親善視察団」が、今年も二月五日から十日まで現地を訪れた。

いま、あなたのいる
その場所で
できることから
はじめましょう

キャラクター：桜井デザイン

一隅を照らす運動総本部通信

文部省の海外派遣研修で、一カ月かけてアジアの七カ国を訪れたことがある。三十年ほど前のことだ。当時、私は教職にあり、それが、初めての海外旅行だった。百万

ラオスで21件目の学校 妙法院・三千院の資金で

一隅を照らす運動総本部は、二月二十九日から三月十日の日程で第九回ラオス学校建設団(二十二名)を派遣した。今回の建設地は、パクセー郊外にあるヘー村の中学校で、その建設資金は、妙法院門跡(菅原信海門主)・三千院門跡(小堀光詮門主)の支援によるもので、二十一校目。

現地は基礎と柱が建っているだけの状態で、セメントとレンガを使った外壁作りが作

業の中心となった。初めて参加した団員は連日の四十度を超える暑さや、慣れない作業に戸惑いを見せていたが、日を追って緊張もほぐれ、子どもたちと身振り手振りで意思の疎通を図り、笑顔も見られるようになった。また、サッカーやバレーボール、折り紙や縄跳びを通しての交流も積極的に行われた。

六日には西郊良光天台宗事務総長と合流、中学校の引渡式に臨んだ団員は、それぞれ

円以上する旅費はすべて文部省が負担してくれた。一ドル三百六十円の時代のことだ。それ以降も、海外には出かけたが、インドには行ったことがなかった。今回一隅を照らす運動総本部長に就任して、視察団団長として初めてインドに行くことになった。

何も調べず、何も聞かずに行くことにした。先入観というものは人の眼を曇らせる。ガイドブックなどは、いかにも人を引きつけるようにできているが、実態とはほど遠い。先入観を持たないと、見るのも全てが鮮明に見え、物事を判断する力も養えるというのが、私の考え方だ。

三時間遅れでデリーに着いた。それも、そんなものだろう。ムツとする暑さも、雑踏のホコリまみれの街も、まあ、そんなものだとい我慢はできた。しかし、翌日の朝早く、空路でナグプールに行くことになっているのに、ホテルに

ガイドが来ない。連絡も取れない、何度電話をかけてもつながらないのだ。慌てた。飛行機チケットは、全部ヤツが持っているのである。同行していた草別書記が汗だくになって、あちこち電話をかける。ようやく現地旅行社に電話がつながったものの、片言の日本語で、鷹揚に「待っててくれよ」とくり返すばかり。そんなこといわれても、飛行機の時間が目前に迫っている。乗り遅れたら、全ての日程が崩れる。スケジュールはガチガチに組まれているのだ。ようやく現地旅行社が、ホテルにやって来た時には、ナグプール行きの飛行機は、とうにフライトしたあとだった。

それも当初予定していたガイドはどうとう姿を見せず、別のツアーガイドが来て「それじゃ、ライプールの行きの飛行機に切り替えましょう」と

いう。いくらその飛行機に乗ったって、もう予定されていた法要に出席するには間に合わない。カンカンになって、何度説明しても「まあ、とりあえず行きましようや」というばかりである。全然、慌てないのである。そればかりか「インドでは、よくあることでサア」などと言う。悟った。

ここでは、日程などはあつてないようなものだ。万事がその調子だ。これがインドだ。ウーム、これは緊張感を持たんといかんぞ。

(聞き手・倉田紀美子)

群馬教区で一隅大会

三月三日、群馬教区一隅を照らす運動推進大会が、群馬県伊香保温泉「ホテル木暮」



を会場に開催され、四百名が参加した。当日は、荒了寛ハワイ別院住職が「伝教大師に学ぶ心の教育」と題して講演。荒師は三十年に及ぶ海外伝道の実践を踏まえながら、現代社会に求められる教育のあり方を力説した。

また、壬生照道一隅を照らす運動総本部長が「インドパニニヤメッタ図書館復興支援」を呼びかけた。

掲示版

第38回一隅を照らす運動 埼玉教区推進大会

埼玉教区では、下記のとおり第38回一隅を照らす運動推進大会を開催します。皆様の参加をお待ちしております。

日時 4月29日(木)
(みどりの日)
12時30分開会

会場 さいたま市民会館浦和
さいたま市浦和区仲町
2-10-22

講師 赤松光真師
(延暦寺一山金台院住職)



一隅を照らす運動総本部

皆様の情報をお寄せ下さい

E-Mail : ichigu@tendai.or.jp